公益社団法人 日本山岳会

宮崎支部報

第78号

令和4年(2022年)4月9日 宮崎市中央公民館

宮崎支部第39回通常総会を終えて

荒武 八起

令和4年4月9日、宮崎支部第39回通常総会を終えた。顧みると一昨年ほどではないにしてもやはりコロナに翻弄された一年間であったが、皆様のご支援ご協力により何とか乗り越えることができた。

総会においては議案とした事業および収支決算報告、事業計画案および収支予算案、各委員会の編成について、いずれも全会一致で承認された。ここに総会の概要を報告する。

＜総会の総括＞

1. 事業報告　A. 公益事業

宮崎支部が取り上げている公益事業には ①ときめき家族登山 ②宮崎家庭裁判所からの少年委託登山 ③宮崎ウエストン祭 ④諸塚山山開き ⑤自然保護活動 ⑥宮崎市中央公民館まつりがあるが、①から③までの行事はコロナ感染防御の観点から中止となった。④の諸塚山山開きは諸塚村の朝日森林文化賞受賞と宮崎支部の「みやざき百山選定」を記念して、朝日新聞社などとの共催で1986年に発足し今年は第37回であった。コロナの影響から集団登山や交流会はせず、登山者の写真・動画コンテストやリモート登山ツアーが2週間にわたり企画された。開山式は参加人数を制限して行われ宮崎支部からは8名のみ参加した。⑤の自然保護活動は、宮崎市山岳協会に所属する9団体の合同事業として、一年前に植樹した小谷登山道周辺の下草刈および年末の恒例行事として登山口周辺の清掃を行った。⑥の宮崎市中央公民館まつりは、この施設を利用する多くの文化団体が年に一度、各団体の活動状況を披露するものであるが、宣伝効果も高いことから我々も毎年参加している。今年も日本山岳会のPR、宮崎支部の活動等について大型パネル6枚を展示した。

B. 共益事業

① 定例登山研究会：毎月第一木曜日 (18時～20時)に開催を予定したが、12回のうち3回はコロナのため中止した。年間の述べ参加者は162名であった。

② 定例山行等 ： 20回の山行計画のうち6回はコロナのため中止した。年間の述べ参加者は218名であった。

2. 支部収支決算報告

支部活動は、会員一人あたり2,000円の本部からの交付金と支部会費3,000円の予算で行っている。例年は財源不足の状況にあったが、コロナの影響で支部活動に制限があった事から、財源的には多少ゆとりがある決算となった。

3. 今年度の事業計画および予算案

公益活動、共益活動とも例年どうり進めていく。特に古道調査について、宮崎支部には薩摩街道・飫肥街道・霧立越えの古道調査報告が求められている。宮崎支部のマンパワーからするとかなり厳しい作業量であるが、皆様の特段のご協力ご支援をお願いする次第である。

4. 総会関連行事

① 特別講演 ： 宮崎市教育委員会の井田篤先生に「すけさんも歩いた日向の古道」というタイトルのご講演をいただいた。目下、古道調査中でもあることから、タイムリーな内容で興味深く拝聴した。

② 懇親会 ：コロナ禍でもある事からパーティションで仕切られたテーブルに4名ずつ分散し、飲食時以外はマスクを着用することで実施した。静かな中にも和気あいあいと楽しく会食することができた。

特別講演要旨 すけさんも歩いた日向の古道

宮崎市教育委員会文化財課　井田 篤

今から約340年前の貞享2(1685)年、旧暦の7月末から2週間ほど、テレビドラマ「水戸黄門」でお馴染みの“助さん”こと佐々介三郎が日向国(＝宮崎県)を訪れている。旅の目的は水戸光圀がはじめた「大日本史」編纂のための史料収集。ドラマのような諸国での世直し的な出来事は残念ながら全くおきていない。今回は、日本山岳会宮崎支部の方々の故郷に残る古道調査にちなみ、この道を歩いた介(ここからは本名で)さん一行の旅の様子や行程を紹介したい。

介さん一行は、同じ「大日本史」編纂従事者であった丸山雲平と供が7名。彼らは薩摩国志布志(八郎ヶ野)から日向国に入った。その後、高鍋藩の番所がおかれていた大平、今でも「おかんばば(往還馬場)」とよばれる古道が残る南平を通り、一行は目的地であった伊東氏飫肥5万1千石のご城下に着いている。ご城下での調査場所は、藩士の学問所としても使われ、談義所(だんぎしょ)とも呼ばれていた願成就寺。今では季節になると境内にウスギモクセイの香り漂う名刹である。この寺に“何か古い記録が残っていない”かと期待を胸に調査した一行であったが、介さんの日記には残念ながら「**文書の一紙もござなく候**」と綴られていた。

一行が城下をたち、飫肥街道から鵜戸街道へと歩を進めた行き先は、今では、運玉投げなどで観光地としても有名な鵜戸神宮であった。ただし、当時のこの地は、少し様子が違う。朝廷から「鵜戸山大権現、吾平(あいら)山、仁王護国寺」の勅号を贈られ、荘厳な構えの仏閣や神社が立ち並ぶ西の高野山とも呼ばれるほどの賑わいをみせていた神仏習合の場であった。分かりやすく言えば、神社として有名なこの地に、江戸時代には寺と神社が共存していたのである。鵜戸山の様子や歴史から、編纂に役立つ資料が数多く残っているのではと期待した介さん一行であったが、結果は「**此の山、久しき寺の由に御座候えども、旧記の類少しも御座無く候事**」というまたまた寂しい状況であった。

日向灘を臨む鵜戸から山道を西へと向かい、飫肥街道へもどった一行は、郷之原(日南市北郷町)で一泊した後、山仮屋、清武、中村、花ヶ島と進み、「水戸宰相家中、黒貫寺来訪の節の応接心得」なるものまで作成し一行を待っていた佐土原藩島津家の出迎えをうけた。場所は、当時の延岡藩と佐土原藩の藩境であった新名爪である。彼らの案内で向った黒貫寺は、日陽山聖歓喜院と号す真言宗智山派の寺院で、今でも西都市都於郡岩爪に静かにそしてどっしりとたたずんでいる。都於郡城主第六代伊東祐国の弟“一海”が入寺し住持となっているように、中世においては伊東氏の庇護を受けるようになり、中世から続く名刹は、本堂、大師八体祝堂、経蔵、書院などの諸堂を持ち隆盛を誇っていた。日向国に入り、飫肥の願成就寺、鵜戸山の仁王護国寺と古文書などの調査を行った介さん一行であるが、いずれも真言宗の寺院である。

黒貫寺も真言宗で、彼らは京都で得た真言宗智山派総本山智積院の添状を持参していたため、寺側も助力を惜しまなかったと思われる。台風襲来のなかここでも調査を行ったが、残念ながら彼らの期待した成果は得られなかった。

その後、一行は、木城往還から豊後街道を通って北へと向かい、木城、美々津、日向をすぎて延岡へ到着した。介さん一行が訪れる2年前の天和二年(1683)、有馬永純の居城であった延岡城では、火災のため本丸三階櫓を焼失している。その後、再建されていないため、介さん達の目に映った延岡城はやや寂しげな様相であったかもしれない。一行が城を眺めながら五ヶ瀬川を舟で渡ると、その北側には今山八幡宮が鎮座していた。延岡城に今もある“城山の鐘”は、元々、明暦二年(1656)に城主有馬康純からこの今山八幡宮に寄進されたものであった。すなわち、介さん一行が豊後街道に別れを告げ、高千穂往還へと西へ歩を進めたこの頃、“城山の鐘”は今山八幡宮にあったのである。

高千穂往還に入り宿をとった北方町曽木には、今でも威厳を漂わせる名刹慈眼禅寺がある。ここでの調査の様子は記されていないが、なんらかの調査を行った可能性は十分に想像できる。曽木の宿場を出発した一行は、椎畑、綱の瀬川と五ヶ瀬川の岸に連なる難所を進み、代官所のある舟の尾を目指した。この峻険な道のりを、丸山雲平は「**九州第一の難所**」と記しているが、介さん本人も自らが綴った『西国御用状留』に「**高智穂と申す西州一の険難を通り申し候**」とその険しさを記している。彼らはその後、舟の尾、一ノ水から七折坂を越え、高千穂岩戸を経てついに日向と肥後の国境へとたどり着いた。

「**肥後、岩上より細川越中守殿関所有り、柳まで弐里半、柳より高森まで壱里半、右、左衛門佐殿案内、此の一宿まで来らん　此こまで、越中守殿衆出迎えられる**」とあるように、関所には肥後細川家の家臣が一行を出迎えており、彼らは日向国を去り草原広がる南阿蘇へと歩を進めていった。

『大日本史』編纂のための史料収集が藩命で、鵜戸神社(日南市)や黒貫寺(西都市都於郡)などで史料

調査を行ったが、彼の望むような史料はほとんど手にすることが出来なかった。一行にとっては物足りない結果であったが、この話しには実は続きがある。介さんの旅の約180年後、介三郎の子孫である佐々俊介が日向国を訪れ、先祖の旅を補うように詳細な調査を行っていたのである。介三郎が達成できなかった旅の目的は、その子孫によって達成され、『大日本史』完成へと繋がっていったことになる。

介さんも通った日向国の古道。これからの調査がより充実することはもちろん、当時の姿で出きるだけ残っていくことを望みつつこの乱文を終わりとしたい．．．

［1月定例山行1］ 大島屋敷山　1月9日（日）

日高 研二

Aコース

令和4年の初山行は日南市南郷町の沖に浮かぶ大島の最高峰「屋敷山（206.2m）である。大島は風光明媚な日南海岸の中では最大の島で、昭和30～40年代は小学校もあり300名を超える島民がおられたが、過疎化の時代の流れの中で、現在は無人島となっている。

大島は2年前に南北縦断トレッキングを行っており、その時、次回は大島の最高峰にトライしようという意見があり、支部の畑島会員が単独で2度の下見をされ今回の山行となった。

当日の天気は申し分ない山行日和。宮崎組14名は清武クロスモールに集合し、午前8時宮崎を出発。また、日向組3名は別ルートで、それぞれ南郷町目井津港を目指し9時30分到着。10時発の市営旅客船あけぼの3で約15分かけて小浜港に到着。

出発前のオリエンテーション中、ある方から声がかかり、話をしてみると「大島プロジェクト会議」の若松会長、門川副会長のお二人で、島の再生と活用に向けて活動されており、今日は山之神神社の修復作業とのこと。また屋敷山の山径の整備も検討中とのことであった。

10時35分、活動開始した。比較的整備された島本道を15分ほど登ると「あこうの大木」に到着。ここから本道をはずれて山道に入り、島の東部にある「パノラマ広場」に向かう。ここで昼食。ここからの眺望はパノラマ広場というだけあって、先ほど渡ってきた青い海の向こうには日南の代表的な山、小松山・男鈴山・女鈴山、遠くは鰐塚山などパノラマ風景が一望でき、皆から感動の歓声があがる。

広場を11時45分にUターンし「桐の大木」の表示板のあるところから右方向に入り登り始めるも、最初の数十分は道なき道であり、急登を藪漕ぎし汗だくになりながら登り、尾根に着くと比較的歩きやすくなったが、木々を越えたりくぐったりしながらアドベンチャー感覚でさらに山頂を目指す。約1時間で山頂に到着。先月、会員4名で下見した時、YAMAPにより山頂と判断した60センチ四方の岩塊が、実は真の山頂でなく、そこから北に10m程にある四角柱が真の山頂であることが判明。これは、畑島会員の下見による正確な道案内の賜物と言っても過言ではない。会員の皆さんに偽山頂を教えずに済みほっと安心。下見をしていたので、何とか予定通り登れたが、下見をしていなければ相当の時間を要したのではと、下見の重要性を感じた。

山頂で集合写真撮影した後、午後1時過ぎに下山開始。もと来た道をUターンし、太平洋の雄大な海原を眺めながら島本道を下り、小浜港に2時25分到着。2時50分、竹の尻港から乗ってきた会員4名と合流し、小浜港に2時25分到着。帰りは猪崎鼻に寄り、展望台から今日山行した大島全島を眺めたのち帰路についた。

＜参加者17名＞谷口敏子・多田登美子・服部澄子・栗林淳子・橋口三枝子・蔵屋とよ・竹田裕見子・風間恭子・荒武八起・日高研二・谷口菊美・武田芳雄・多田周廣・服部岩男・畑島良一・四宮林三・平田五男・

＜コースタイム＞
清武クロスモール8:00発(日向組：目井津港直行）～目井津港9:30着　目井津港10:00発～小浜港10:15着 港登り口10:35発～あこうの大木10:50着～11:10パノラマ広場着（昼食）11：45発～11：50桐の大木（登山口）発⇒12:50屋敷山山頂～13:05発～小浜港14:25着　小浜港14:50発～目井津港15:00着15:30発～猪崎鼻～清武クロスモール17:00着(日向組は日向市に直帰)
＃Bグループ： 屋敷山に登らずパノラマ広場昼食後、大島散策～竹の尻港14：33発　～小浜港14:50着

市営旅客船

屋敷山山頂

下山後　目井津港

Bコース

谷口 敏子

今回も「参加することに意義あり」などと勝手な老いの理由をつけて、多田御夫婦を巻き込んで参加した大島山行。賑やかで楽しそうなAグループとの別れに、やや羨望と情けなさがないでもないが、これもまた良しと歩き始めた。歩き始めると「これもまた良し」どころか至福の歩きだ。山側の斜面はずっと眞っ黄色のツワブキと白いノジギクの花道。左側は真っ青な海としぶきをあげる波涛が煌めく。海上に点在する岩上には2～3人の釣り人。沖をゆく小舟。潮騒を聞きながら、他愛もない4人の会話も楽しい。年末年始の多忙さにやや疲れ気味の私には、こころ解き放される歩きの時間だ。あこうの大木を過ぎると荒廃した家の庭に一本のみかんの大木。菊美翁が竹でひっかき棒を作り、枝を引き寄せて何個か頂いた。美味しかった。いずれは朽ちてゆくみかん。「食べてくれてありがとう」と言われた気がした。

「魚見櫓」の上で、潮騒を聞き潮風に吹かれながらの贅沢な昼食。その後、小学校跡に登り往時の子供たちをしばし偲ぶ。少し下った先に卒業生の記念樹苑が作られていた。「○○子」「○夫」などと名札が下がっているのも、お互いの呼び名で親しみあっていたのが想像できた。下りに入り港が見え出すと何軒かの廃屋があり、庭木や家にあまたの蔓が巻き竹や芒が生い茂っている。かつて此処にどんな暮らしがあったのだろう。赤いハイビスカスと万両の実に住人の一端を見た気がした。2時前に港に着いた。振り返って、改めて再生を始めた島を眺めた。大島はいつ来てもその時々の新たな姿で迎えてくれる。次はどんな顔を見せてくれるだろうか。楽しみである。

・海近く睦みたる日もかつてあらむ芒と蔦に覆はれし廃家（いえ）
・島と家捨てたる人の痛みともハイビスカスの赤き血の色
・廃屋の庭にひと本実るみかん「食べていいよ」と
　言はれたような

［1月定例山行2］釈迦ケ岳　1月15日（土）

服部 岩男

山名の由来は山頂に釈迦像が安置されていたとの言い伝えがある。その他に法華嶽薬師寺の創建にまつわる話や、平安時代の女流歌人の第一人者の和泉式部にまつわる逸話もある。法華嶽薬師寺公園の西側登山口から9:00 に日向の皆さんとは別々に出発する。杉林の中の幅広い林道を登る。6合目を過ぎると雑木林になる。急に足元に岩が露出してきて登りにくくなる。ロープの付いた岩場も少しあり登山らしくなる。雑に登ると怪我をするので慎重に登る。ほとんどの山も一ヶ所ぐらいはロープ場もあるので、常日頃、練習と鍛錬が必要だと思う。山頂に11:30頃到着する。山頂からは景色が見通せないので、そこから5分ほどの展望台まで行く。桜島が少し霞んで幻想的に見えた。また高千穂の峰や韓国岳も見え、山頂には雪が少し積もっていた。展望台にはシャクナゲが数本あるが、花芽はほとんどついていない。今年の5月初旬は寂しいだろう。その後山頂に戻る。山頂には東屋風の薬師寺奥の院がある。その前の広場には、日向の皆さん10人が弁当を食べていた。我々も一緒に弁当を食べる。賑やかで楽しい昼食であった。

昼食後12:30に下山を始める。下りは登りよりさらに注意する。急な岩場には20mmロープ、急な坂には25mmほどの太いロープが手すり状に2m間隔のコンクリート杭に通してある。非常に下りやすい。旧道も少しあったが私は新道を下った。登りは2時間30分、下りは1時間45分ほどかかった。冬なので花はひとつもなかったが、登山口の公園にはマンリョウが20本ほど赤い実を沢山つけていて彩りを添えていた。日向の皆さんも下ってきたので、一緒に解散式をした。15年ぐらい前に一度、支部山行に参加したことがあるが、その時より今回のほうがすごく楽に登れた。風もなく寒くもなく楽しい山行だった。

<参加者　23名> 清水弘子・清家順子・服部澄子・橋口三枝子・蔵屋とよ・竹田裕見子・白賀智子・風間恭子・荒武八起・日高研二・武田芳雄・服部岩雄・四宮林三・平田五男・川越政則・会員外8名

<コースタイム> 法華嶽駐車場発 9:00～五合目9:50～八合目10:40～山頂11:25～(展望所往復後昼食)～山頂発12:30～登山口14:20～解散14:35

山頂

[3月定例山行]　諸塚山の山開き　3月13日(日)

竹田裕見子

「日本一早い山開き」」のキャッチフレーズで知られている諸塚山の山開きに行った。登山歴2年目なので勿論初めての参加である。諸塚山山開きは、諸塚村の朝日森林文化賞受賞と宮崎支部による「みやざき百山選定」を記念して1986年に発足し今年は第37回であった。

コロナの影響から集団登山や交流会はせず、登山者の写真・動画コンテストやリモート登山ツアーが2週間にわたり企画された。開山式は参加人数を制限して約30名で行われ宮崎支部からは8名のみ参加した。諸塚神社宮司による登山者の安全祈願の後、各界代表が玉串奉奠を行った。登山者代表は荒武支部長であった。諸塚村村長をはじめとした各氏の挨拶の後、最後に日高副支部長が「山の誓い」を朗読した。朗々たる声が静かな山間に響き渡った。

諸塚山は標高1342mで古くから信仰の対象の山である。山頂には10数基の円墳があり、それが山名の由来だそうだ。福岡の英彦山、霧島の高千穂の峰と並ぶ修験道場であり、古来から霊山として崇められた。別名を大白山ともいい、清浄な山という意味をそのまま醸し出している。登山道はきれいに整備されて往復2時間程度であった。天候に恵まれると、祖母山や阿蘇などがパノラマで見ることができ、登山口周辺にはアケボノツツジが群生しており、花芽をたくさん付けていた。見頃は4月下旬～ゴールデンウイーク頃らしい。是非見に行きたい。

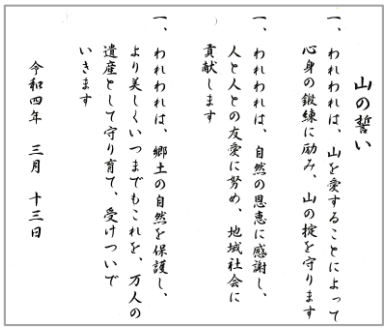
今回の企画の中に登山者を楽しませる豪華景品が当たるクイズラリーがあった。クイズは難問だったが「三人寄れば文殊の知恵」大先輩の知恵で簡単に解けた。私達には地産地消の美味しいお弁当や記念品がプレゼントされた。個人的には記念品の木製のペナントが素敵で嬉しかった。また、朝日新聞社の方に写していただいた山頂での写真が翌日の新聞紙面に掲載された。皆様と一緒に諸塚山の山開きに参加できて大変勉強になった。

車中で先輩方から、コロナ禍以前の山開きには毎年何百人もの参加者があり、前夜祭では村を挙げての歓迎行事があったと聞いた。一日も早くコロナが終息して、また賑やかな山開きが開催されることを祈っている。

〈宮崎支部参加者8名〉 橋口三枝子・竹田裕見子・荒武八起・日高研二・平田五男・川越政則・会員外2名(興梠・高山)

<コースタイム> 開山式典10:00～登山開始10:30～山頂12:40～(昼食)～山頂発13:10～登山口14:10

開山式　コロナ禍のため参加者を制限して行われた



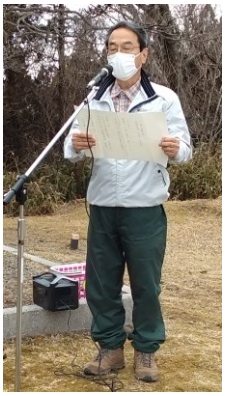
山の誓い

一、われわれは、山を愛することによって心身の鍛練に励み、山の掟を守ります

一、われわれは、自然の恩恵に感謝し、人と人との友愛に努め、地域社会に貢献します

一、われわれは、郷土の自然を保護し、より美しくいつまでもこれを、万人の遺産として守り育て、受けついでいきます

令和四年　三月　十三日



「山の誓い」を述べる日高副支部長

春とは言え、樹々はまだ芽吹いていなかった

双石山・加江田渓谷開き、 3月20日（日）

登山グループ

鶴田 鎮丈

宮崎市山岳協会及び加江田渓谷の会による「双石山山開き・加江田渓谷開き」が開催された。参加者は、関係者を含め約120～130人であった。設けられていた祭壇の上は桜が満開であった。少し肌寒い。

～うぐいすの祝詞の中を双石～～

8時30分神事。神事の後、参加者は希望コース別に3班に編成された。A班:登山コース(山小屋折り返し）49名2組に分けられた。B班:登山コース(麻畠　硫黄谷）11名。C班:渓谷トレッキングコース約50名。自分は、A班2組で総勢23名であった。9時15分出発。加江田川には河鹿が鳴き始めていた。シイ、カシ等の生い茂るこの一帯の特徴は典型的な温暖林であり、国の天然記念物に指定されている。登山道には、花筏の新しい葉が出ており、すでに蕾が一寸法師のように乗っていた。またヤマザクラが登山道に散っており、ちょうど満開を迎えていた。また二枚貝の化石を登山道で見ることができた。

～ケスタ地を踏み分けていく花の道～

登ったり下ったり、ほとんどが展望の見通しきかない稜線をたどる。唯一、第二展望所からは宮崎平野、シーガイヤ等が一望できた。　～手をかざす阿波岐原に八重霞～　到着した山小屋では火が焚かれ、銀杏や焼き芋が焼かれていた。

昼食後、下山開始。秋には落ちているはずのむくろじの実が高い枝先に残っている。また白い花「サツマイナモリ」の群生があちこちで見られた。渓谷の水の音が近くなり、旧トロッコ道に着いた。山の神に手を合わせ、無事全員下山したことを感謝した。歩いた歩数は、17,777歩であった。

＜宮崎支部参加者8名＞服部澄子・橋口三枝子・蔵屋とよ・荒武八起・日高研二・武田芳雄・鶴田鎮丈・荒武達郎

＜コースタイム＞丸野駐車場9:35～麻畠10:50～第二展望台11:40～避難小屋12:10(昼食)12:50～丸野駐車場15:00

丸野駐車場広場における安全祈願

加江田渓谷散策グループ

前原 満之

天気に恵まれたこの日、渓谷沿いの山々には、緑の中に今を盛りの山桜があちこちに咲き、コロナやウクライナで憂鬱な日々の日常をしばし忘れさせてくれる。我々の班は「加江田渓谷の会」会長渡邊泰己さんの案内で渓谷に入る。多目的広場までは約3.2kmである。以下お聞きした内容のいくつかを列記する。

#渓谷の名称の変遷：家一郷谷→日向ライン→加江田渓谷 #入口正面の山は石炭山 #出会った植物：タチツボスミレ、タラヨウ（葉の裏に傷をつけて字が書ける）、アオキ（雌雄異株で雄木がないと雌木に実がつかない）、ハナイカダ（今の時期、葉の表の真ん中に蕾がついている）、イワタバコ（食べられる）、サツマイナモリ（崩落跡などに群生し、沢山咲いている）、キバナノホトトギス（渓谷で人気の植物） #素掘りの炭焼窯跡（言われないと気付かない） #硫黄谷にある昭和天皇の御製 苔(こけ) むせる岩の谷間に生ひしげるあまたのしだは見つつたのしも

昼食後、渓谷の会副会長児玉さんによる苔の説明（普通の植物は根から水分を吸収するが、苔には根がなく、大気中の水分を葉状体等から吸収している）。さらに、宮崎あやとり同好会会長の中武さんによるあやとり実演があった。

＜ 宮崎支部参加者6名＞ 清家順子・谷口敏子・前原満之・谷口菊美・多田周廣・川越政則

＜コースタイム ＞丸野駐車場発9:35～多目的広場着11:50～（昼食）～帰路出発13:15 ～丸野駐車場着14:30

渡邊氏らの渓谷の会は、平成25年に渓谷入口に「学習の森」として植樹し、森の中には散策路もつくっている。

加江田渓谷。手前には礫岩、対岸には波状岩が見られる。甌穴が見られる所もある。下流に比べ上流は緩やかな流れが続く。

[4月定例山行] 鰐塚山山開き 4月17日(日)

荒武 達郎

宮崎に移住して1年半、日頃の運動不足を解消したいという思いで誘われるがまま3月の双石山山開きに参加した。その時「4月17日の鰐塚山山開きにももちろん参加するよね！」という言葉につられ参加する運びとなった。

当日の早朝は気温10度と肌寒かったが、前日の風もやみ晴天の中、登山口にて山開きが執り行われた。田野天建神社の宮田宮司による安全祈願の神事の後、田野まちづくり協議会・松浦会長、小手川代表の挨拶をいただき、いよいよ鰐塚山山頂を目指し登り始める。

鰐塚山といえば1,118mとさほど標高のある山では無いが、宮崎市内からはほぼどこからでも見え山頂にはNHKを始めとし各局の電波塔のある山としてシンボル的な存在である。電波塔保守のため山頂まで道路が整備され(少々狭く離合しづらい場所もあるが)車で山頂まで登れるという珍しい形態の山でもある。

移住して来て車やオートバイでは幾度となく登ったが自分の足で登るのは初めてで、諸先輩方の足手まといにならないかドキドキであった。今回の田野からのルートを事前に調べると子供さんでも登れる。難易度低し・・・？ 確かに登り始めると登山道はきちんと整備され、岩や石も無く、手入れの行き届いた杉や檜林の下、柔らかな土を踏みしめ小鳥のさえずりに浸り快適に。突然、四つん這いになって登らなければ成らぬところもある。汗をかきながら運動不足を後悔した。山頂まで「あと2,000m」の案内板をまだまだ先は長いと言う思いで過ぎ、電波塔用の送電線鉄塔下で小休止。鉄塔看板に5/11の文字、鉄塔全部で11基？まだ半分も登って来てないのかと落ち込んでしまった。鉄塔を見上げながら、最近塗装施工されてるが作業された方は道具やペンキを担いで登ってこられた？凄いなぁと感じたのは私だけだろうか。

「あと1,000m」の案内板を過ぎ電波塔が間近に見えて来た所にイワザクラの群生地到着。初めて見るピンク色の花弁に疲れも吹き飛んだ。花弁も可愛いが ギザギザの葉っぱも心を和ませてくれる。確かにこのピンクの花弁を見た時に可愛い、持って帰りたいという気持ちは解らなくもないが盗掘はやめて欲しい。ここに咲くから可愛いし、登山者を和ませてくれるのだから。

<参加者20名> 多田登美子・服部澄子・蔵屋とよ・竹田裕見子・白賀智子・荒武八起・吉田直人・日高研二・武田芳雄・多田周廣・櫻木勉・服部岩男・四宮林三・平田五男・川越政則・荒武達郎 会員外4名(小斎平・大住・井久保・蛭川)

<コースタイム> 8:30清武ナフコ発～9:00 登山口・山開き神事～9:20 登山口発～10:00 あと2,000mの案内板～10:30 あと1,500mの案内板～11:10 あと1,000mの案内板～11:50 イワザクラ生育地～12:30 山頂(昼食)～13:10下山開始～15:00 登山口着～15:30清武ナフコ・解散

田野天建神社宮田宮司、安全祈願

登山者代表 井久保氏による玉串奉奠

安全祈願後 集合写真

山頂

イワザクラ

日本の固有種であり本州から四国、九州の丘陵地帯上部から山地帯の石灰岩の隙間などに生育する。環境省から絶滅危惧に指定されており、宮崎県では絶滅危惧IA類に分類されている。原因としては園芸用の採取・盗掘が主要因と考えられている。

田野町在住の小手川利彦氏は、町づくり協議会会長の松浦繁盛氏とともに田野町の自然保護活動、鰐塚山山開きの開催、子供向けの自然教室などに尽力されている。また、自然保護推進員としてオオイタサンショウウオやイワザクラの保護活動にも情熱を注がれている。

宮崎市山岳協会に感謝状

日本山岳会宮崎支部を含む9団体よりなる宮崎市山岳協会に対し、遭難救助活動に貢献したとして宮崎市・清山知憲市長から感謝状が贈呈された。5月12日に行われた贈呈式には川越政則会長(日本山岳会会員)を含めた3名が出席した。

双石山では宮崎市南消防署や警察などの救助隊が出動する遭難事故が一昨年7件、昨年7件、今年は4月までで4件発生しているが、このうちの4件に対して同協会に協力要請があった。救助隊員だけでは捜索が困難な事例に対し、山に対する豊富な知識と救助技術を持つ同会会員が危険を伴う夜間帯などの救助に帯同し、遭難場所の特定・救助隊員の安全確保・道案内などで貢献していることが高く評価されたものである。特に今回の感謝状贈呈のきっかけとなった事例は、今年2月15日の単独行女性の滑落事故に対してと思われる。幸いにも山行計画が所属する山の会に提出されていたので、遭難場所をある程度絞って捜索できたが、それでも発見に至るまでには長時間を要した。負傷の程度が重く、ヘリによる救出は翌日に持ち越された。川越会長らは夜間を通し負傷者の傍にいて寒さから守り、付き添い励まし続けた。

双石山は標高509mの低山でありながらシイ・カシを主とする天然広葉樹から成り、古くから森林浴の場と

して親しまれ、年間に一万人を超える登山者で賑わう。東西に屏風のように伸びる山体の南東面は比較的緩やかであるが北西面は隆起した岩が急崖をなしており、滑落などの重大な事故が多発している。崖も単純ではなく幾重にも屹立した壁をなしている所が多く、この事が遭難場所の特定を困難にしている要因でもある。

双石山は正規の登山ルートを辿れば、岩や木の根を掴んで登り、尾根に出ると樹林の中をゆっくり楽しめる素晴らしい山である。しかし、一方ではザイルなどの装備・技術を必要とする山であり、重大事故の多くは興味だけで困難なルートを辿った場合に発生している。

贈呈式後の懇談の席で、小谷登山口へのトイレ設置を永年にわたり要請していることにも話が及んだが、市長からも前向きなお話をいただいた(文責・荒武八起)。

[グループ山行] 福寿草を訪ねて 2月11日(金)

平田五男

8:00に日向COOP駐車場で宮崎組4名と待ち合わせ日向からも4名の参加。3日前には雪が舞った高千穂秋元地区、福寿草にも少し雪が残っている事を期待して2台の車で出発！延岡インターから高速に乗り、よっちみろ屋で休憩後、1時間弱で秋元神社に到着。

福寿草は、キンポウゲ科の多年草で春を告げる代表格である。早春2～3月に直径3cmほどの可憐な黄色い花をつけるが、夏までに光合成を終えると地上の部分が枯れ、春の開花まで地下で過ごす。日本には4種類の福寿草類が分布し、秋元の福寿草は「シコクフクジュソウ」に分類されている。

福寿草の自生地は諸塚山北側斜面にあり、県の天然記念物に昭和8年12月5日指定されている。諸塚村の黒岳麓・猟師藪の保護地でも生育している。神社の駐車場にはすでに先客が5台、何とか空きスペースに停められた。神社には神水と言われている湧水が有名で、参拝者より水汲みの来訪者が多いそうだ。参拝を終えて、喉を潤すと裏山に向かう。砂防ダムを2か所超えると歩きやすい林道に出た。毎年、観察に来ているが伐採や崩落で地形が変化するので一番乗りしたら目印のケルン作りをする。

渡渉地点にたどり着くと、伐採された杉の枝が山の様に積み上げられ歩きづらい。さらに谷あいを登って行くと北斜面に福寿自生地と書かれた記念柱がポツンと建ちその上の斜面に金色に輝く花が見えて来た。岩場には沢山の花がみられ砂場に近い斜面には蕾の群生と開花した群落がある。天気が今一であるが此処まで来た甲斐がある。唯々残念なのは写真撮りの人々のマナーが欠けている点！　役所に立ち入り規制ロープの設置整備をお願いしたい。

〈参加者8名〉栗林淳子・橋口三枝子・竹田裕見子・橋口光博・平田五男・栗林忠信・会員外(竹田こうき・柴田俊一)

〈コースタイム〉 秋元神社10:25～西谷奥山(福寿草群生地)11:20(11:50)～12:32秋元神社

[宮崎の自然]　ミズナラ

石井 久夫

えびの高原の自然観察路池めぐりコースの周辺には様々な年代の多くのミズナラが生育している。林のなりたちは想像するに親木からドングリの自然落下によるものと、鳥のカケスや野ネズミが貯食行動により、あちこちに貯蔵したドングリを食べ忘れそれが自然に発芽して形成されると思われる。

ミズナラは植生でいうと温帯・ブナ帯のブナと共に日本を代表する樹種で、夏緑広葉樹といって日本ではありふれた樹木である。しかし、北の植生からみると稀なものとなり北方では絶滅危惧種で丁度日本でみられる北方系の高山植物が珍重されることの裏返しともいえる。

夏緑広葉樹は秋が深まると葉が赤や黄色に色づきやがて落葉する。落葉は古くなった葉が枯れて落ちる老化現象で植物にとっては重要な生理現象であり、脱落する前にタンパク質、核酸、クロロフィル(葉緑素)などの細胞内容物が分解される。

ミズナラはブナと並んで日本の代表的な樹種でえびの高原や九州では標高の高い1,000m付近に自生し広く日本全体に分布している。ミズナラの語源は「牧野新日本植物図鑑」によると材に多量の水分を含んでたやすく燃えないからと説明されている。

ミズナラは温帯に大木が多くコナラと違って葉は殆ど無柄で葉身は下部が耳状である。総苞片は覆瓦状に並んでいるが背がふくれあがっている。幹は高さ30m、胸高直径は1.5mにもなる大木がある。堅果は2cm前後、殻斗は椀形で外面には小さな鱗片が密生している。材は淡褐色で材面に髄線が密に並んで美しく、この属では日本では一番の有用材で利用価値がある。家具や建築、船舶、車両、洋酒樽として用いられている。外に良質な薪炭材、ピアノ、スキーの板にも利用されている。

〈メモ〉ミズナラ　別名オオナラ

Quercus mongolia var grosseserrata

山地に生えるものは高さ35mくらいになる。樹皮は黒褐色を帯び縦に不規則な裂け目がある。葉は互生し葉柄はごく短い。葉身は長さ5～20cmの倒卵状長楕円形で基部はくさび形、耳状で5月頃本年枝の下部から長さ4～5cmの雄花序をたらし上部の葉腋に雌花序をつける。堅果は1.5～2.5cmの卵状楕円形殻斗は椀形外側には小さな総苞片に瓦状におおわれる。

[リレー通信]　一本の電話から

大谷 セツ子

先日一本の電話がかかってきた。相手は東京の出版社の男の人の声であった。私の応対が悪かったせいか、3日後に写真入りの名詞と文章が届いた。内容は下記の通りである。

「この度国立国会図書館を通して、『みやざき百山』と巡り合うことができました。今回先生のご本を知って、大谷先生は、山に対してなんと情熱的な方なのだと感じました。本書に綴られた言葉、写真、その隅々から、大谷先生の山に対する並々ならぬ熱い想いを感じると同時に、その想いに心より感動いたしました。山の風景や花の写真、そして山にまつわるお話やエッセイが素敵なのはもちろんのこと、周りのみならず世の中に対して愛情をもって接せられる大谷先生の温かいお人柄をひしひしと感じました。まさに大谷先生の歩まれた証ともいえるこれほど素晴らしい作品をこのままにするのは非常に残念でなりません。これからの時代でも一人でも多くの方へ届けていきたいと強く思い、この度はお声がけをさせていただきました。ご提案させていただいている電子書籍は、スマートフォンやパソコン等の画面で読むことのできる書籍のことです。紙の本ではなくデータとして新しい形で後世にも残すことができ、これまで届けられなかった若い読者へも届けられると考えております・・」。

この書類を荒武支部長に送り、版権が宮崎日日新聞社にあることもあり、4月21日宮日文化情報センターの井野浩司氏にお会いした。名刺交換をするうち、40年前(1992年)今西錦司元日本山岳会会長と共に高千穂峰に登ったことなどを話しながらスムーズに話が進んだ。話し合いの結果、この件については宮日新聞にお任せすることになった。私は加齢とともに山行もままならなくなったがこの『みやざき百山』を一座一座読みながら、宮崎の山はすばらしいなと改めて思うこの頃である。

夫、大谷優は若い頃から短歌を趣味とし一時期短歌結社「山茶花」の同人であった。短歌は何よりの心の拠り所であり、自分の病がわかってから病床で『山の鼓動』の編集を始め、平成16年に出版した。夫の残した財産『みやざき百山』と『山の鼓動』は私にとっても大事な財産である。

- 青春の意気燃えたてし双石の山の岩膚いまも変わらじ
- 尾鈴嶺に雲流れゆくたまゆらを今日の朝に恋ふべき吾か
- もののふの越えたる峠カシバルの霧に濡れたる萩の重たし
- ビバーグの寒さに覚めて聴く風の音がさびれた神話を語る
- 霧島の火口を射りし朝の陽は神こそいませまろき虹たつ

[事務局だより]

支部行事予定(5月～8月)

月 日	行 事 名	標高	備 考
5月21日(土)	定例山行 高千穂の峰	1,574m	大淀川ゴルフ場 7:30集合
6月2日(木)	第271回定例登山研究会		宮崎市中央公民館
6月11-12日(土日)	定例山行 白鳥山・時雨岳	1,639m, 1,546m	ヤマダ電器駐車場9:00集合
6月25日(土)	定例山行 飯盛山	846m	大淀川ゴルフ場 8:30集合
7月7日(木)	第272回定例登山研究会		宮崎市中央公民館
7月10日(日)	定例山行 鉾岳	1,277m	ヤマダ電器駐車場6:00集合
7月23日(土)	定例山行 蘭牟田池外輪山	500m前後の外輪山	清武ナフコ駐車場6:30集合
8月4日(木)	第273回定例登山研究会		宮崎市中央公民館
8月11日(木)	山の日・市山岳協会との合同		双石山
8月27日(土)	定例山行 向坂山	1,684m	ヤマダ電器駐車場6:00集合

支部会務報告(1月～4月)

月 日	事業・行事	開催場所	人員	備 考
1月6日(木)	第267回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	16	
1月9日(日)	定例山行 屋敷山		17	日南市大島
1月15日(土)	定例山行 釈迦ケ岳		25	
2月3日(木)	定例登山研究会			コロナのため中止
2月6日(日)	定例山行 好燐梅			コロナのため中止
2月18日(日)	定例山行 仰帽子岳			コロナのため中止
3月10日(木)	第268回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	16	
3月13日(日)	諸塚山山開き	諸塚村	8	
3月20日(日)	双石山・加江田渓谷開き*		14	参加総数100名
4月9日(土)	第39回通常総会	宮崎市中央公民館	41	委任状13
4月9日(土)	第270回定例登山研究会	宮崎市中央公民館	22	
4月17日(日)	定例山行 鰐塚山		20	

*宮崎市山岳協会主催

投稿のお願い 山行に関するものはもとより、随筆・詩・短歌・俳句など何でも結構ですので皆様の積極的な投稿を何卒よろしくお願いします。また支部報に関するご意見などありましたら編集委員会へ忌憚なくお寄せください。
カラーページのご案内 配布します本支部報は、経費節減のため白黒印刷ですが、日本山岳会ホームページの宮崎支部を開きますと全ページがカラーで閲覧できますので是非ご覧下さい。

編集後記

コロナ過で、様々な制約を余儀なくされるなかでも自然は変わりない瑞々しい生命の息吹で楽しませてくれます。予定の山行も五山実施することができ、新緑や咲き盛る花々を堪能したことが、寄せられる山行記録からわくわくと伝わってきます。皆様のご協力真に有難うございました。高齢化で全員参加がだんだん難しくなる昨今、それぞれのペースで楽しく参加できる「共に・助け合い・喜び合う」そういう支部であることを嬉しく誇りに思います。「さあー 先ずは一歩から！」(谷口)

公益社団法人 日本山岳会宮崎支部報 第78号
発行責任者：荒武 八起
編集委員：谷口 敏子(編集委員長)、多田 登美子
栗林 淳子
事務局：日高研二
〒880-0933 宮崎市花山手東2丁目17-11
Tel, Fax 0985-52-6685, 080-1766-1207
E-mail： k-hidaka@har.bbiq.jp
口座: ゆうちょ銀行 記号17310 番号16269811
名義人：(社) 日本山岳会宮崎支部